

○教師としての原点

- ・元・小学校教師としての経験が教育観の基礎に。
- ・家庭訪問や授業参観で親の愛情の強さを実感。
- ・地域や学歴で親の教育意識を判断してはいけないと確信。

○教室運営の哲学

- ・親こそ子どもへの最大の支援者であり、先生と三位一体で成長を支えるべき存在。
- ・親との連携を遠慮する必要はない。愛情と協力は引き出せる。

○牛久市での教室実績

- ・教育熱は高くない地域でも、優秀児が多く育ち、全国でも上位の成績。
- ・幼児教育に力を入れ、長年にわたり「全国2位」を継続。
- ・地域の限界を言い訳にせず、教材の読み方と保護者へのアプローチで成果を出す。
- ・どんな子でも伸びる力を持っている。
- ・地域・環境のせいにならず、教育者の姿勢と工夫次第で保護者の協力も得られる。
- ・保護者の信頼を得る教室をつくるのが、成功の鍵。

○幼児優秀児テストを通じた成長と確信

- ・子どもの素材は関係ない
- ・教室では毎年、素材的に40人中30～40番の子どもが幼児優秀児過程テストに合格している。
- ・「うちの子は無理」という思い込みを外し、「人間ならできる」という信念で指導。
- ・お母さんの意欲が子どもの成長を強力に後押しする。

○親子の多様性と可能性

- ・優秀な母×優秀な子:もちろん結果が出る
- ・優秀な母×普通の子／普通の母×優秀な子:どちらも結果が出る
- ・普通の母×普通の子:ここでも結果が出る！

→ どんな組み合わせでも、環境次第で子どもは伸びる

○面談と声かけの工夫

- ・体験面談では幼児優秀児テストを見せて親の意欲を高める。
- ・「小1から始めれば小5で中3終了」と未来の可能性を語り、自信を与える。

○テストへの取り組み

- ・模擬テストで練習しながら挑戦する子どもたちは、後に有名校に進学。
- ・「奇跡の子ども」と言われる幼児優秀児は、全国の年長児10万人中わずか25人前後。
- ・算数の訓練が脳を刺激し、国語や英語の力も連鎖的に伸びていく。
- ・幼児優秀児とは、生まれながらに特別なわけではない。
- ・普通の子どもが挑戦を通じて能力を開花させ、優秀児になる。
- ・教室は「奇跡が起こる場所」であり、教材と親子の関係で未来が変わる。

○公文式における「教える」と「見守る」の本質

○教えることへの葛藤と原点回帰

- ・公文式は一方的に教えるのではなく、「自学自習」を支える学習法。
- ・必要以上に教えることで、子どもが自ら伸びる機会を奪ってしまう懸念。
- ・教えることを控えるスタイルが「良い先生」とされた時代があった。

○教室運営の現場での悩み

- ・大教室では子どもの手元を見る機会が少なくなりがち。
- ・KC導入で初めて手元を見るようになった先生も。
- ・形式的なフィードバック文化が指導の本質を揺さぶることも。

○公文式の多様性と迷い

- ・全国の教室見学を通じて、教え方・雰囲気・スタイルは千差万別。
- ・一切教えない静寂な教室もあれば、手取り足取りの指導教室もある。
- ・悩みの末、公文公会長の本に立ち返り、自分の指導哲学を再構築。

○公文式に宿る「子どもへの愛」

- ・大阪の公記念館で見た手書き教材と父子のやり取りに感銘。
- ・子どもが間違え続けても寄り添い、見守り、導く姿に公文式の本質を実感。
- ・教える・突き放す・見守るの選択は「その子のその日に応じて」決めることが重要。
- ・公文式は「教える／教えない」の二元論では語れない。
- ・伸びようとする子どもを見極め、最適な関わり方を選ぶ。
- ・子どものそばで目の前の変化に気づき、指導に生かすことが、愛のある教育。

○公文式と「軸のある指導」への気づきと確信

○全国講座から見える本質

- ・算数B教材を解いていく子どもが「腑に落ちる瞬間」を先生方が観察。
- ・毎日の教室でも起こっていることであり、日々の指導にこそ真価があると実感。
- ・ただし、講座の子どもができる子だったため、あれが「普通」と思うと現場でつらくなる先生も。

○記念館と教材の気づき

- ・大阪の公記念館訪問をおすすめ。教材が全国講座でも目立つように。
- ・公文式の原点＝父子の学びから生まれた教材。そこに込められた「期待と祈り」に触れられる場所。

○指導のスタイルは自由でいい

- ・騒がしい教室も静かな教室も、幼児の全体指導の有無もすべてOK。
- ・目指すもの（公文式の軸）がぶれていなければ、先生の得意を活かせばいい。
- ・講座や運動も「やらされる」ではなく、軸に照らして取捨選択する意識が大切。

○子どもとの関わり方の本質

- ・公文式は「教えない」ことではなく、「その子に今何が必要か」を見極めること。
- ・消しゴムで消すのではなく、教材にヒントやメッセージを添えながら導いていくスタイル。
- ・「一言声をかける／黙って見守る」その見極めこそが愛のある指導。
- ・子どもへの愛情を軸にすれば、ぶれることなく判断できる。

○幼児優秀児過程テストへの情熱と「子どもを見る力」

○挑戦の始まりと孤独

- ・幼児優秀児ブームの終焉後、情報が途絶え誰も手をつけていなかった時代にスタート。
- ・NHKの報道により、公文式が「スパルタ教育」と批判され、過程テストは封印される。
- ・先輩からも否定的な声を受け、「親も先生も狂っていなければ出ない」と揶揄される。

○渋谷幸子先生との出会い

- ・論文に衝撃を受け、自ら手紙を出して教室見学へ。
- ・息子が通信生として1年間学び、教材ではなく「子どもを見ること」の重要性を教わる。
- ・渋谷先生の「子どもを見ていればわかるでしょ」という言葉が指導の根幹に。

○マニュアル教育への疑問

- ・全国に存在した“なんとか派”によるマニュアル指導に違和感。
- ・教材理解が浅いうちにマニュアルに頼るのは危険。
- ・一人ひとりに応じた指導こそが、真に子どもを伸ばす方法であると実感。

○成果と人間的成長

- ・幼児優秀児は30年間で100名以上。不合格者はわずか。
- ・勉強だけでなく、人間性や感性の豊かさ、リーダー性も育まれている。
- ・たおやかで折れない柳のような強さを備えた子に成長。
- ・公文式は「学力開発」だけでなく、「人間教育」である。

○指導者の使命と「能力開発」の本質

○公文式における指導者の使命

- ・指導者の最も重要な使命は「子どもを賢くする」こと。
- ・学年相当や半年先程度では不十分。未知の力まで引き出す「能力開発」が求められる。
- ・公文はそれを可能にする学習法であり、高い月謝に見合う価値を提供している。
- ・教材理解と「子どもを見る力」
- ・教材を大人目線で解くだけでは本質は見えない
- ・教材には緻密な設計と意図があり、子どもの反応を通して初めてその深さが分かる。
- ・特にB26のような要の番号では、繰り上がりの理解が問われる。
- ・パターン学習だけで済ませず、本当に理解したかを観察することが必要。

○「見て見ぬふり」はプロ失格

- ・進度が停滞している子、苦しんでいる子を放置せず、すぐに動く。
- ・机間巡視で子どものつまずきや成長の瞬間を見逃さない。
- ・結果だけではなく、取り組み方・理解の過程に注目する。

○教材の選び方とスランプへの対応

- ・子どもに教材を合わせる
- ・「教材に子どもを合わせる」のではなく、「子どもに教材を合わせる」ことが鉄則。

・苦手な部分に原因がある場合、そこに戻ることでスランプからの脱出を促す。

○精密な教材選定の例

・C171の筆算割り算でつまづいた子に対して、C181～190で割り切れる問題を使って土台を再構築。

・さらにはAの引き算、C111の九九などで原因を特定し、復習と初出を組み合わせで対応。

・「実験→検証」を繰り返しながら事例を蓄積し、見通しの力を養う。

○スタッフ研修と指導の再現性

○教室の力はチームでつくる

・スタッフは棚田先生のコピー。指導内容を完全に共有・研修し、同じ指導が可能に。

・大学生のスタッフも、適切な研修とマニュアルによってプロの指導をこなす。

・保護者にも指導の共通言語を浸透させ、「保護者も棚田のコピー」に。

・子どもを見続ける。教材を読み解く。感覚ではなく理論で見通す。

・それを毎日積み重ねていくことで、「ただの先取り」ではなく「本質的な賢さ」を育てていく。

○保護者を巻き込む教育の力

○教室成功の鍵は「三位一体」

・子ども・保護者・指導者が一体となって取り組むことで、教育効果が最大化。

・保護者に「我が子に関わることは楽しい」と感じてもらうことが重要。

・指導者はアドバイザーとして、実際の実践は保護者が担うスタイル。

○面談で信頼と夢を共有

・全保護者と個人面談を実施し、優秀児の可能性と魅力を語る。

・「〇〇ちゃんもきつと行ける」と具体的な未来像を提示。

・保護者の協力をお願いすると、誰一人拒否せず前向きに応じてくれた。

○保護者の愛情と教育意識

・地域や学歴に関係なく、母親の「我が子を伸ばしたい」という気持ちは圧倒的。

・指導者の情熱と工夫があれば、教育への関心が低い地域でも子どもは伸びる。

・保護者との信頼関係が築ければ、教室の力は何倍にもなる。

○教育者としての誇り

・子どもは先生の「本気」で変わる。

・教育は「目の前の小さな未来を大きく変える」仕事。

・保護者対応は苦手でも、信念と工夫で乗り越えられる。

○保護者との関係構築と個別対応の徹底

○母親との定期的なコミュニケーション

・教室開始前に毎回保護者を個別に呼び出して面談。

・子どもが難所の教材に入るタイミングや進捗の変化などを丁寧に説明。

・お母さんたちは教材を手にししながら動画・音声で記録するほど熱心。

○セリフ付き指導の工夫

・子どもが教材に取り組む際の声かけを具体的なセリフで記載。

・自宅学習でも教室と同じ口調で再現できるように配慮。

・ズレを防ぎ、家庭学習の質を維持。

○教材進捗とスタッフ・保護者対応

○スタッフへの研修と教材理解

・忙しさの中、大学生スタッフが教材セット業務に参加。

・教材進捗の目安や保護者への伝達ポイントをマニュアル化。

・E教材では進捗・理解度に応じて復習や引き算などを混ぜた柔軟な対応。

○保護者へ一律対応する理由

・教材内容の変化をすべての保護者に伝えることで、疎外感を防ぐ。

・教室に対する不安・違和感を感じさせないよう、顔を合わせることを重視。

・お母さんの表情からコンディションを読み取り、適切に関わる。

○教室への愛着と継続への仕組み

・教室運営スタイルによって「辞められない教室づくり」を実現。

・教材・面談・個別対応により、高い満足度と依存度を築く。

・教室が「学習の場」であると同時に「信頼の場」となっている。

<質疑応答まとめ>

○教室運営における保護者対応の徹底

○全員保護者と接点を持つ仕組み

- ・基本的に 全生徒の保護者が来訪(送迎、自転車、働くママ問わず)。
- ・教室文化として、学習後に保護者と話すことが「当たり前」に。
- ・来られない場合でも、後日プリントを持参して必ず来る。
- 保護者への連絡スタイル
- ・授業前に「来てください」メールを送信して個別対応。
- ・入会后すぐに連携を開始し、新人の保護者ほど丁寧に呼び出し。
- 面談の位置づけ
- ・月に約3回、希望制で面談日を設置。
- ・初回面談は全員実施(1時間／見通しグラフを活用)。
- ・普段から接点が多いため、面談利用者は少なめ。
- 教室環境と仕組みづくり
- 面談・相談用スペースの確保
- ・教室とは別に 7畳の待合室を用意。
- ・保護者対応時はスタッフが教室内でサポート。
- 駐車場の工夫
- ・ピックアップ専用の駐車場を離れた場所に設置(10台分)。
- ・保護者を呼ぶ際は優先して駐車可能＆徒歩で来てもらう。
- 成功の秘訣
- ・「保護者は呼ばれるもの」「来るのが当然」というブレない姿勢を貫く。
- ・呼ばれた保護者には 必ず得るものがある体験を提供し、信頼と継続を促進。
- ・他の保護者が先生と話している様子を見て、「来るのが自然」と感じてもらえる環境づくり。

(終)